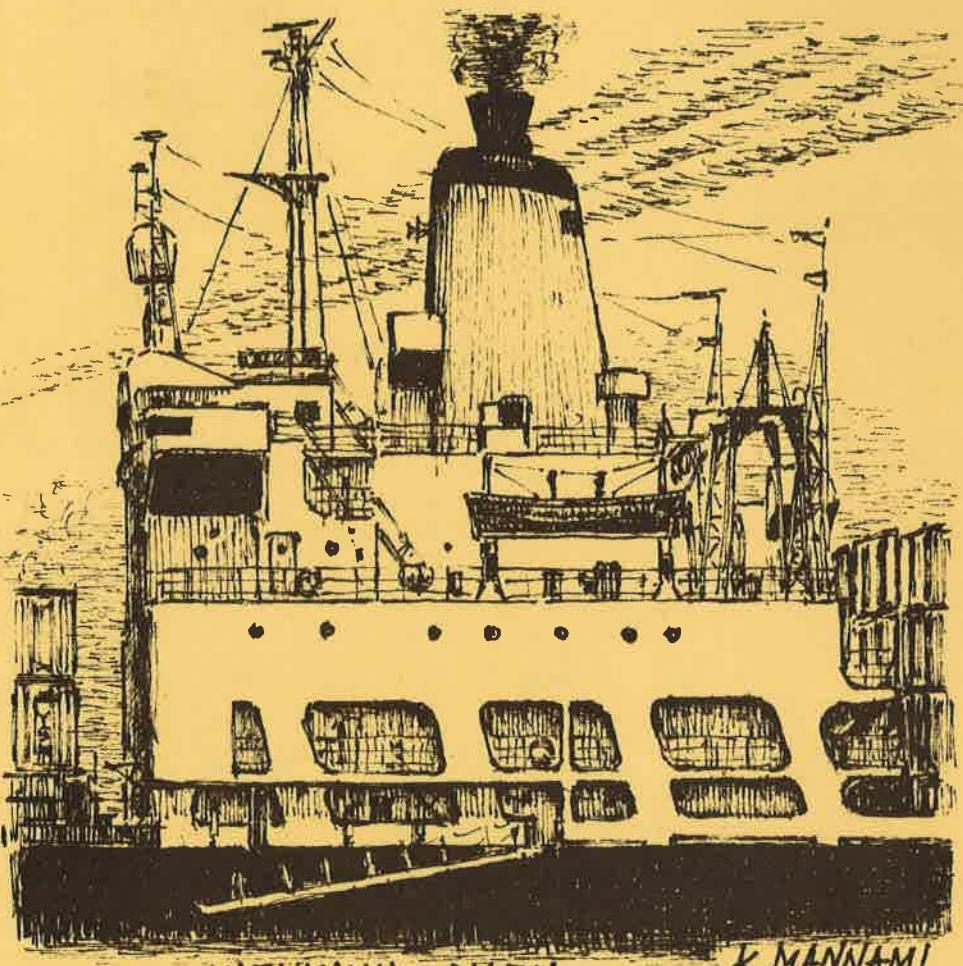


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



第6号

海文堂書店 1982・7[6]

〒650 神戸市中央区元町通 3—5—10
(電)

目 次	
少年と本	国領駿
神戸野球物語〔I〕	棚田真輔
現象学の思い出	海老原明美
汽笛（下）	角本稔
ぶっく・えんど	
郷土誌の窓	

四

次

- 1 -

少年と本

国領駿

ボクは大正二年、埼玉県比企郡都茂川村の、小さな酒造家の三男として生をうけた。いうなれば、大正のしょっぱな生まれの世代である。

今までこそ、東京都心まで、一時間そこそこの距離ではあるが、比企丘陵のいちばん奥座敷ともいべき山里で、家の背後から外秩父の山系が起伏しつゝ連なり、都茂川と呼ばれる清冽な流れ（現在も）のほとりで少年時代の十年余りを過した。

当時としては、大きさに言えば、文化果つる避地とでも言いたい鄙ひざではあるが、村内の天台宗別院、都茂山一乗院慈光寺の名刹を中心として、関東板碑のメッカとして知られた土地柄である。

電灯という文明の光が初めてともったのが、ボクが小学校へ入学した大正八、九年の頃で、わが家には店の若

い衆数名が居つたのに、どういう訳かワンマン親父は、学校から下校したボクに、石油ランプの掃除と手入れを徹底して強制した。十三燈もあるランプのホヤを磨きあげて灯先を整え、それぞれの油槽に石油の捕給を終るまでには、たっぷり一時間の時間を要した。だが、電灯なる文化の光の恩恵は、少年の日の仄かな記憶の中で、ぶつたまげる程に明るいばかりか、毎日のランプ掃除のノルマから少年を解放してくれた。そんなボクの、小学生前期の田舎での生活エリアには、書店と称するものは一軒も無く、最短コースの武州小川町へ行くにさえ、幾つかの小さな峠を越えて、七キロ余の道のりを歩かねばならなかつた。乗合馬車にのるためににはお金が必要るし、自転車はわが家に数台あるにはあつたが、ラージとか、ブライム、ゼブラなどという般来車で、今日の高級自動車のようなものだから、手に触れることも許されず、子供ごろに何とも頑固でドケチな親父であることよと感じていた。

公立小学校の五年生に進級したばかりの或る日のこと、

得意先廻りから戻つて来た親父の自転車の荷台に、小さい包みがくくりつけられていて「お前のだ、持つて行け

つ」と、恐ってでもいるかのような言葉である。親父の意を解しかねる儘に、二階の自分の部屋に持ち込んで開けてみて度肝どかんを抜かれてしまつた。

学校教材室の、硝子戸棚の向うに鎮座している双眼鏡が目の前に現われた。しかも学校教材室のそれより數等高級品であるらしいことが、少年なりの鑑定でも判断を下すことができた。

双眼鏡の皮ケースの下に敷かれていたのは、「少年俱楽部」と「日本少年」の二冊の月刊誌であった。如何に田舎少年とはいえ、雑誌名を知らぬことはなかつたが、教科書以外、初めて自分の所有として手にした書物であり、このときが本とボクとの最初の出会いとなつた。その後も三星社という小川町の書店から、欠かすことなく毎月二冊の雑誌が届くようになり、ボクの心境は、頑固でドケチな親父から「親父殿」へと変節を余儀なくされるに至つた。田舎住まいのボクは、町に住んでいる恰好のよい少年たちと違つて、容姿も野暮なうえに、本との出会いさえ大変に晚生おくれであったように思われる。

さて、「少年俱楽部」と「日本少年」の二つの月刊誌

のことだが、講談社さんには申訳ないが、ボクはどちらかといえば、「日本少年」のほうがボクの好みに合つていたともいふべきで、五十余年を経過した今日でも、忘れ得ぬ二つの連載作品が心の中にきざまれている。

そのどちらも吉田絃二郎の筆になるもので、「栗の花の咲く頃」と「芝太郎の手紙」という見出しであり、高畠翠宵が二作品ともに挿絵を担当されていた。ボクは年余にわたるこの二つの連載小説の中で、吉田絃二郎に依り、松尾芭蕉やニイチエを教えられた。当時「日本少年」の編集に当つていた詩人の有本芳水や、松山思水の名を知つたのもこの頃のことであつた。

「少年俱楽部」では、佐藤紅緑の「少年讃歌」「あゝ玉杯に花うけて」吉川英治の「神州天馬峠」など、文字通りの耽読たんじくに明け暮れた。

やがて田舎育ちの少年も思春期へと突入して、旧制中学校から高等学校へと、都会の下宿生活に移行していくが、その頃ともなると、藤村、牧水、啄木、白秋に始まる人並みの文学少年の道をたどり、下宿屋の六帖の書架にも一、三百冊の書籍も並ぶようになつた。

当時の記憶のなかで、忘れられないことといえば、「梁塵秘抄」との出会いと別れであった。さだかなこまかい記憶は失せてしまったが、或る日ボクは本郷壹岐坂を上った辺りの古書肆の店頭で、一冊の見馴れぬ本の頁を繰っていた。

いにしえ童子の戯れに 砂^{さな}塔^{とう}となしけるも

仏に成ると説く經を

皆人持ちて縁結べ

仏は常にいませども 現ならぬぞあはれるな

人の音せぬ曉に

ほのかに夢に見えたまふ

遊びをせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子供の声聞けば わが身さえこそ揺るがるれ

少年の感性を搖さぶる何かもの哀しいものがあった。

口惜しいことに、その「梁塵秘抄」なる書籍を購入するには、ポケットの金が六十銭ほど足りないので、ボクは後髪ひかれる思いで書肆の店頭を後にせざるを得なかつた。

それから一週間ほども経過しただろうか、ボクは親父殿からの定期送金を握りしめて、くだんの書肆に駆けつけたが、すでに見知らぬ人の手に渡って、後の祭りといいう結果に終ってしまった。

いま、加古川のボクの陋屋には、十名をこえる若者たちが、連日眼やかに出入りを繰返している。

多勢の若者たちをじっと眺めていると種々様々だが、

極めて一般的に言って、一部の者を除いて昔ほどの読書がなされていないようを感じられる。視聴覚による知見の度合いが如何に発展したとはいえ、読書を好みない若者は、ものの四、五分も話を交しているとすぐ解る。

関西料理ならよいかも知れないが、薄味でまったく中味の乏しさに、こちらの方が寂寥を感じて白けてしまう。「積読」より乱読者なれだ。漫画もそれなりにいいかも知れないが跛行といもんだ。本も読まないような者、俺の家に来るな」

そのかみの田舎育ちの純情少年も、遠く長い歳月の旅路の故か、かつての親父同様に平氣で憎まれ口もたたける今日この頃ともなつた。

いかで磨^{はすまな} 撥磨守^{わらわ}の童^{わらわ}して
飾磨^{しづま}に染むる搗^{なぐ}の衣着^{きぎ}む

(加古川流域史学会代表・燔燎義塾々長)

いかで磨^{はすまな} 撥磨守^{わらわ}の童^{わらわ}して
飾磨^{しづま}に染むる搗^{なぐ}の衣着^{きぎ}む

神戸野球物語

[I]

—ワンオールドキャツツの勃興—

神戸商科大学教授 棚田真輔

高校野球のシーズンがまたやつてきた。大正四年に「全国中等学校優勝野球大会」としてはじめられてから六十四年目にあたる。昨日の新聞によると本年は昨年の三、三九四校をしのぎ、三、四〇〇校を超える参加校があり、最南の沖縄から最北の北海道にわたる地区で、四十九の代表を決める地方大会は、ピークになると全国で一日に三〇〇近い試合が展開される。そして阪神甲子園球場への代表がすべて決まるのは七月三〇日である。春の選抜大会と共に高校野球は、学校スポーツの中心的存在となつて全校あげての活動となり、文字通り日本を代表するスポーツ行事の一つとなつた。甲子園球場でのあのさわやかなプレーは、テレビや新聞で報導され、人々の心を引きつけ話題となつて全国津々浦々にまで波及する。

また、プロ野球のできごともスポーツのトップニュー
スとなつて、毎日テレビや新聞をにぎわしている。

現在日本で展開されているスポーツのほとんどは、歐米から伝播されたもので、その初期のものはヨーロッパからであった。野球はアメリカから少し遅れて導入され、技術の指導、用具、組織といったスポーツの発達に必要な条件に恵まれなかつたにもかゝわらず、他の条件の良いスポーツを凌いで発達した。野球が主として学校の課外体育に採用され、全国に普及をみるのは明治三十年代に入つてからである。と云うのは、この期に日本の最高学府の第一高等学校が、明治学院、青山英和学校（現青山学院）、慶應大学などに勝つて東都の王座を獲得、明治二十九年に横浜外人チームを破り、一躍有名になつたことがあげられる。一高の学生中馬庚が明治二十八年にそれまで“ベースボール”と呼ばれていたものを“野球”と呼名し、『野球』（明治三十年前川文栄堂）『野球年報』（明治三十五年美満津商店）『野球部史』『野球之友』（明治三十六年民友社）など発行し野球熱を大いに刺激した。神戸における野球もこの明治三十一年を境にして一高式

の野球が普及して、各学校にチームが編成され、一般人の俱楽部も誕生するのであるが、この少し前に神戸ではきわめて幼稚な野球が展開されており、これが土壤となつて一高式野球が育つた。

ベースボールは神戸をはじめ横浜などの開港地で主として居留外国人によつてはじめられたという説がある。しかし神戸ではこれはあまり有力な説ではない。それ以前に外国人宣教師の指導で実施されたり、有志で書物を研究したり、教師に指導されるなどの例の方が確かなようである。ただ、日本の子供や野球好きの先生が、神戸の外国人遊園地（のちの東遊園地）のクリケットを見て、野球と“かんちがい”して、ボールとバットを入手してバウンドボールを打球して遊んだというのは事実のようである。明治二十六年頃のことである。ずっと後になつて東遊園地での居留外国人の野球が、打、守交代時に“天地”と云つてゐるのを聞いた神戸の少年達は、天地だから上下の意味で交代するものと理解して使用している。それは“チエンジ”的意味であったという場所である。

同院は明治二十二年W・R・ランバスによつて神戸の東

さて、神戸での最初のベースボールは、兵庫県尋常師範学校で、明治二十五年であった。神戸一中『校友会誌』第一号によると、「師範は二十五年頃より行はれ、二十八年より栄え初め教員竹村、前野の二代の奨励にして、漸く進歩し、毎土曜日には競技をもなし尾崎詮光の如き好手も出て、規則審判法等も大いに整頓し附属小学校生までも此技を教へらるるに至りき……」とある。因に、竹村鍛教諭は明治二十五年一〇月～同三〇年四月、前野闘一郎助教諭兼舎監は明治二十五年三月～同二十五年十二月の就任であり、尾崎詮光は明治二十九年三月卒業している。アメリカから原書を取り寄せ野球技の研究をしたのは杉野精造（明治三〇年三月卒業）であり、明治二十九年一〇月居留地遊園の芝生のグラウンドで、神戸クリケットクラブ（KCC）の居留外国人チームに挑戦。股引脚絆に草履ばきで素手の師範は三イニングで三十一点を取られ、八点得点して破れた。この記念すべき神戸での国際野球試合の審判は日州文次郎であったという。

郊原田の森の近くに創設された。神戸一中『校友会誌』によると、「米国宗教会が建てたるものなれば、開院後間もなく野球の行はれしも当然なり、従つて規則は年々新らしく腕前は益々古くして、当時第一等の位置を占め居たり、ノッキングの如き、ダイレクトキャッチの如き皆此校より伝えしなり……」と関西学院の野球はルーツや練習方法についても常に新らしいもので、神戸野球界をリードして指導的役割を果たしていたという。小川陽一、瀬戸保三（共に明治二十七年入学）他に大河隆徳、和田忠次郎、倉本慎平、木村俊三らが、体操用具の中にある野球のボールやバット、ミットを借りプレーしたのだが、小川の回想によると、「ネットを張つて四、五人対抗のゲームをやつた……一人がノックそしてほかの者がこれを受けることもあつた……」という。いわばキャッチボールや、打球練習、ノック程度のもので、せいぜいダイレクトボールを打ちはじめたことが、画期的な新しいやり方で、それまではクリケットのように投げられたバウンドボールを打つ方法が一般的なやり方で、二組に分かれてゲームをする事などめつたになかつたよ

神戸レガッタ・アンド・アスレチッククラブ（K R A C）やKCCの居留外国人における野球について触れておこう。K R A Cは明治三年にA・C・シムという人によってスポーツ活動と社会活動を含めたようなクラブとして創設された。KCCはその一年前に兵庫クリケットクラブとして誕生していたが、いづれもイギリス人を中心としたクラブで、クリケットとボートが中心となつて活動されて、野球は重要視されていなかつた。これらのクラブで野球が市民権を得るのは明治二十九年からである。といふのはこの年、横浜対神戸外国人のインター・ポートマッチの対抗種目の中に野球が入つたのである。明治二十九年は一高が横浜外国人チームと日本最初の国際野球試合を開いた年であり、3イニングの試合ではあつたが、KCCも師範生と対戦した年にあたる。横浜居留外国人の間でも野球がスポーツの華とまでいわれるようになるのは、明治の後期のことであり、一高はじめ慶應、早大といった日本学生チームの覇者たちの挑戦が頻繁となつてからであった。アメリカ系の野球を専門とするチームを持ち、東都に近い横浜でさえこののような状態であり、

うである。瀬戸は明治三十五年頃に神戸商業に英語の教諭として就任し、野球部長をして神戸野球界に大きな功績を残す。

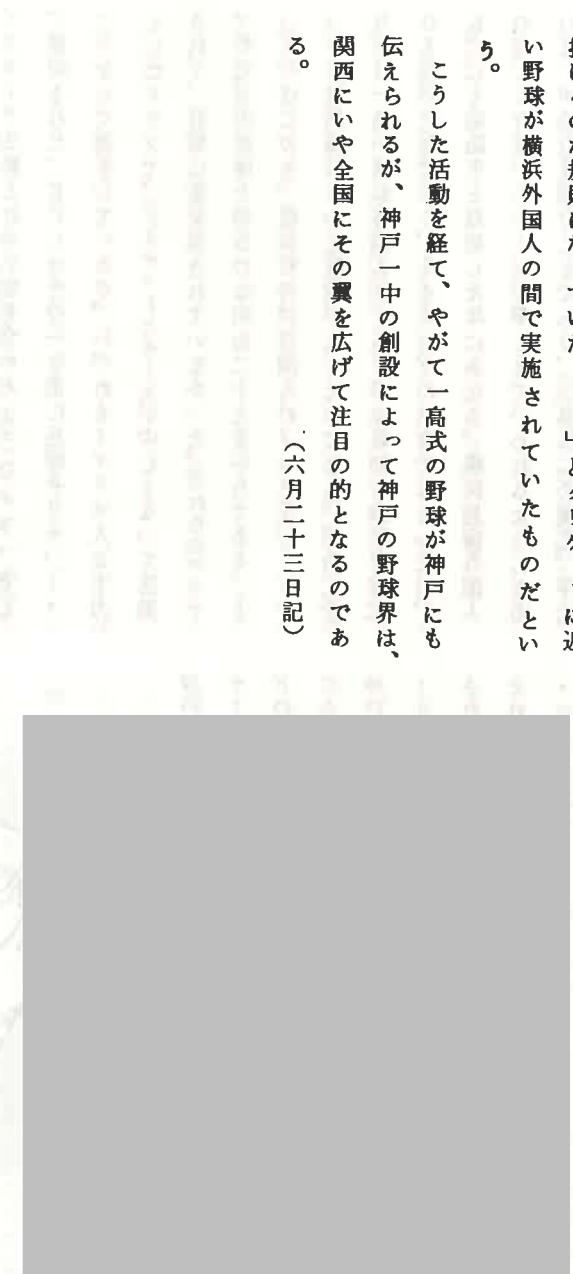
三番目に古いのは神戸商業で、明治十九年橋通三丁目に校舎を移転した。明治二十八年頃でも全校生一〇〇余名の小規模な商業学校で、明治二十九年に同校を卒業した安藤敬三が、「キャッチャーはワンバウンドしたボールを受けとる。……：フライを打つてもそのボールを素手でとる。スポーツは主としてボールレースでした。あとたまに野球をやつた程度……」と回顧しているように、ワンバウンドボールを打つたり、それを補球したりする程度のもので、当時はまだミットもグローブもなかつたのだという。ところがアメリカ人労のランバスを月棒五〇円で招聘し英語を担当させており、彼は関西学院を創設したW・R・ランバスの弟で、フットボールを県商に伝えた人であることから、野球も指導したのではないかと思われるが、それを立証する資料は現在何一つ発見されていない。

最後になつたが、神戸居留地のスポーツクラブである。

投手がボールを投げる時には、一方の手を膝に当て、そ
うっと下から投げたという。しかも、ストライクの始め
二つまではワンバウンドで投げ、三つ目にダイレクトを
投げるのが規則になっていた……とクリケットに近
い野球が横浜外国人の間で実施されていたものだとい
う。

こうした活動を経て、やがて一高式の野球が神戸にも
伝えられるが、神戸一中の創設によつて神戸の野球界は、
関西にいや全国にその翼を広げて注目的となるのであ
る。

(六月二十三日記)



現象学の思い出

海老原 明 美

大学時代は心理学を専攻した。三年になって専門分野
を決める時、躊躇もなく小木貞孝教授の精神病理学と
病跡学と決めた。大学病院なり、一般の病院の神経科の
カウンセラーになるのなら、霜山徳爾教授の方が良かつ
たのだが、霜山教授のカリキュラムのハードスケジュ
ルについてゆけそもそもなく、また、その割に当時の私を
魅するものがなくて、小木教授のアドバイスにもかかわ
らず、小木教授一本槍でいった。(教授は両方をとるよ
う勧めてくださった)

小木教授は私達七六年入学者に専門を教えるのを最後
に、七九年に大学を退職され、作家生活に入られてしま
った。先生の在職中、私は四ツ谷のキャンパスで一番
高い教授館の十階の彼の部屋が好きで、何かあると押し
掛けで行つてはお茶をご馳走になつた。彼は既に作家と

して大賞を受賞しており、二足の草鞋の彼にとって、学
生に時間を取られるのは口惜しかつたろうが、私が訪ね
て行つても、謙な顔一つせず迎えてくださることが多か
つた。

小木貞孝教授——作家加賀乙彦氏——を、師として考
えるより、一人の先達として考えるようになったのは、
大学を卒業してからである。大学四年の時にはもう師弟
関係が切れていたのだが、何かあると彼の許に電話して
相談にのつてもらつた。そんなことで、私は社会人にな
るまで彼にずっと甘えていた。社会人になって初めて、自
分がいかに彼に依存していたか、知つたようと思う。自動
車会社の巨大な組織の歯車の一つとして私は生活を始めた。
小木氏が東京大学医学部を卒業して、仕事の傍らフラン
ソスで流行り出^{はなれ}したメルロ・ポンティの「現象学」を仲間
と訳し始めたのは、二十代の後半であったと思う。

「忙しい、忙しいけれども充実した二十代」彼は私の
空虚を指摘する時に言つたが、私がこの「忙しい、忙し
いけれども充実した」時間を持つたのは、会社に入つて
から後であった。二十代の後半に差し掛かり始めた私に

とつて、小木氏は師ではなく、時代を異にしたライバルであるように感じることが、この頃よくある。私は既に学生ではなく、学問のみを追求できる立場ではない。しかし、そんな身軽な自分になつてみて初めて、「学問」が見えてきたような気がするのである。

現象学には他にも思い出がある。京都に嫁したシノが彼女の現象学の講読会に私を誘つたことがあった。シノとはクラスメートとして親しい間柄にあつたにもかかわらず、私の悪い癖でどうしてもオープンになり切れず、お互に遠慮があった。彼女は細身の骨の細い体つきで、目が大きく、論理的で明晰な女性だった。彼女の理路整然とした口調に負けるのが恐くて、その講読会を断つたような気もする。が、本当のところは、彼女がそうした難解な本を読破することにどうしても共感できなかつたからだつた。

彼女に永い付き合いの恋人がいるのを告げられたのは、三年生の後期の頃だったと思う。その時、私は初めて彼女に「女」を見たのだった。そして私は自分を恥じた。とんだ思い違いをしていたと。彼女も、そして私も同じ

女という、当り前の事実に気付いた時には既に、現象学精神医学を専攻していた——をずっと待ち続ける立場にいたのだった。恋人は長期休暇にしか帰つてこない。多分好きな人に逢えなくて、焦ら立ちを感じることもあるだろうが、彼女は嘔氣にも出さなかつた。恋人と同じ学問に身をおきたいと考えた彼女が、現象学の講読会に参加したと考へるのは易い。私は固い哲学用語の隙間に初めて暖い人の血を感じたのだった。彼女は去年の六月に結婚し、夫と共に京都に行き、児童相談所で働いていたのだ。

彼女は高校時代の同級生——名古屋の大学の医学部で精神医学を専攻していた——をずっと待ち続ける立場にいたのだった。恋人は長期休暇にしか帰つてこない。多分好きな人に逢えなくて、焦ら立ちを感じることもあるだろうが、彼女は嘔氣にも出さなかつた。恋人と同じ学問に身をおきたいと考えた彼女が、現象学の講読会に初めて暖い人の血を感じたのだった。彼女は去年の六月に結婚し、夫と共に京都に行き、児童相談所で働いていた。千葉県船橋市在住



タグボートと神戸港を出港する貨物船

汽笛（下）

神戸観光汽船船長 角 本 稔

最近港から船の汽笛が余り聞えなくなつた。その原因の第一が、バイロットとタグボートの無線使用、第二が騒音公害と考えてきた。

第三 見送り人の減少

大きな貨物船が貨物を船腹一杯に飲み込みタグボートに曳かれゆつくり岸壁を離れる。

船出は船長以下緊張の一瞬だが、別離の悲しさの中にも人々の希望が感じられる。

それでは波止場には沢山の見送りがあるだらうと目をやるがこれがいらないのだ。広い岸壁で船を見送つてるのは、二、三人の人影だけである。外に家族や友人の姿は見えない。見えるとすれば、船のロープをはずした作業員と釣人位のものである。

この岸壁に立つ二、三人は船会社より代理店業務を委ねられている代理店の人なのであり、船が波止場を離れるごとに事務的に手を振つて車で会社へ帰つてしまふ。

五色のテープが舞い「螢の光」の曲が流れ手を振りあい、長の別れを惜しむ船出の風景はここには無く、

シンと静まりかえって恐しいほどの無情の光景である。

これでは船長も「別かれの汽笛」を高らかに鳴らせない。しかしこれとは対照的に、練習船や県民の船、海上大學船が第四突堤から出航する際の人のすごいこと。ボートアーミナルには激励の横断幕が無数に張られ、鈴なりの見送り人である。見送る人と見送られる人の間には五色のテープが一時間も前から交され、お互い様々な会話を船が離れるまで行われている。船が徐々に波止場を離れ始めるとそれは涙なみだの大変な別れのシーンとなる。これでは船長も心情的に汽笛を鳴らさざるえない。時にはランチに乗つて見送つて行くものだから、波止場を離れ閑門近くまで何度も長く長い汽笛を鳴らしながら港を出て行くのである。

しかし貨物船の出航数と比較してみると、このような特殊な船の出航はきわめてまれなのである。

貨物船の淋しい出航風景は高度成長期昭和四十年代の後半、特に四十八年末のオイルショック以後顕著となり、私達港の船員にも「変だな」と思われ始めたのである。

しかし、原因はそれ以前に始まっていた。外国航路を

が埋め尽くされた程であった。

ストの結果、協約は会社側の大軒な譲歩で船員に給与や労働条件改善の利を見たが、盟外船や発展途上国の船に比較すれば数倍のコスト高ともなり、これをきつかけとして能率の悪い船やコスト高の船は次々と売却され始め、日本船員の職場が縮められて行つた。

そしてこれに徹底的な追い打ちをかけたのが昭和四十八年末中東動乱により引き起こされた「オイルショック」である。それまでただ同然で入つていていたエネルギーの中心的役割を占める石油。その価格が一挙に五倍とはね上がり、産業界全体や市民生活に大パニックを引き起したのである。当然物価も驚異的に上昇し、四十九年の賃上げでは各労組が頑張って三十五%～四〇%の給与アップを見たのであり、海運関係もこの例外ではなかった。

しかしながら船のコスト高で売船が続けられていたものに一層の追加がかかったのも事実である。中核六社と

系列会社では、五十年度三十三隻、五十一年度四十八隻そして五十三年度には何と百隻にものぼる船が海外へ売却されたのである。これにはコンテナ、鉱石、LPG、

かかる各船会社は、外国との競争力を高めるため、昭和三十八年に海運集約を行い、今のような「日本郵船」、

「商船三井」、「川崎汽船」、「ジャパンライン」、「山下新日本汽船」、「昭和海運」(順不同)の中核六社で構成して、中小の船会社は各系列下に入った。しか

し一部の船会社だけは独自の経営方針を打ち立て「便宜置籍船」を推進して行った。大手中核六社は政府から造船の利子補給等手厚く保護された。加盟外の会社にはそれは無く、加えて余分な制約も受けないものだから、他社が行えない方法の便宜置籍船を増強し、安い外国船員を雇つて収益を増やしていく、一匹狼の独壇場が続くのであった。

この事だけが原因とはいえないが、次第に船会社同志の過当競争が激化、そのシワ寄せが当然のことく船員にもたらされた。昭和四十七年春には、労使間の協約交渉がもつれ込み、あの九十日間も日本船のほとんどが停船するといった有名なストライキが起つたのである。その時は神戸港外にも外地から帰つて来る船が次々とストに入し停船するものだから、実に百五、六十隻の船で海面

自動車、タンカー等各専用船への切り替えも並行して行われた。

ここで奇妙なことが起つた。中古船の買い主はギリシャ、香港、台灣人が多く、そのほとんどの会社が香港にあつた。船の国籍はリベリア、パナマ等が多く、乗組んでいるのは韓国、フィリピン、東南アジアの安い賃金の人々だ。しかし実際には売船会社が堂々と運航していた。これでは日本人船員の職場は狭くなる一方であり、長期自宅待機か、もしくは辞めて行かざるをえないものである。この頃の昭和五十三年に海員組合が行つた船員の意識調査にも、不況や二百カイリ問題(漁業関係)、雇用問題では「切実だ」、「船に乗れなくなる」、「将来を考えると不安」と倒産、失業に対する生々しい声が出されている。

自宅待機予備船員は全体の六十三%～七十三%もあり、各社は大幅な余剰船員を配置転換や自動車メーカー、デパートへ出向させた。

「コンテナ船なんか船じゃない！」最近下船したコンテナ船の乗組員が語っていた。港であつかう貨物の七十%以上はコンテナーによつて運ばれる。世界の幹線



ポートアイランドに着岸するコンテナ船・鞍馬丸 (59,295t)

航路を受け持つ現在の花形船の船員が、何故にその様なことをいうのか。朝入港すれば夕方出航する定期航路の

船も、さほど診しいことではない。船員はその間、荷役や出航準備に追われ、上陸して家族や知人に会い、心の安らぎを覚える暇もない。実際にフル生産に追われるコンテナ工場の一員である。

これはコンテナ船に限らず、タンカーや鉱石船等でも内地での停泊は常時一日で、三、四日の停泊は一年間に一回有るか無いかである。♪「はじめて来たこの港、たった短い四、五日だけど、涙に浮かぶ街あかり……」この二十数年前の藤島恒夫の歌も、現代の船乗りさんは、とてもうらやましい歌詞であろう。

一方船員家庭はどうか。全日本海員組合が全国的に行った「船員生活総合実態調査」によると、妻からの回答は赤裸々に現代船員の環境や家庭を報告している。これにより、乗船勤務と家庭との二重生活の苦しさや、主人や父に会いに行けない実情も明らかになった。

船員の年間収入は、平均年齢四十二・一才で、四二三・七万円である。(これは船団業種八部門の平均値から

計算している)

月平均三十五・三万円で、陸上に比べて高いように思われるが、ボーナスを引くと、月平均は下がり、船員保険は月々四万円前後引かれ、所得税や雑費を引くと手取りはさほど多くない。

しかし家庭との二重生活のため、家庭へ送金する。これも妻と子供二人の平均的家庭では一〇・一十五万円の送金では一・八万円の赤字を計上している。十五・二〇万円以上から赤字が解消する。

家庭支出の上位は、土地、家屋の購入資金の積み立て及び支払い、子供の教育費、交際費等である。特に子供が高校、大学へ行く四十代後半が最も生活が苦しくなる。高校で三・六万円、大学で七・五万円が必要で、妻の四割がパートや何らかの仕事で収入をえ、家計を応援している。その収入も七・五万円を超えてはじめて生活のゆとりができるが、働く比率は大都市より地方が高い。

その家庭の子供は、現代の高学歴社会のため、ほとんどが高校、大学へ進学する希望を持ち、受験勉強や塾通いに精を出し、時間を費やすので父が入港しても、仲々

会いには行かないものである。

一方若い船員も雇用の先行き不安や、マイホーム志向で経済観念が強く、帰港しても停泊中には、ネオンの巷では余り羽を伸ばさないので、彼女も出来にくく、出航の際波止場まで見送りに行くような女性もいないのである。

かつてメリケン波止場には、外国航路の船が帰航すると、面会に行く若い女性や、子供連れの奥さんの姿を多く見かけた。久しぶりの対面で胸は高鳴っていたのである。「どこから来られましたか。」と私が問うと、「長崎です。」「新潟です。」と小声で答えて呉れたのを覚えている。「遠くから大変だな。」と思つたものだが、いつしか日本船の減少と共にその様な光景は映らなくなつた。アンケートにも「あなたはご主人の乗船中一年間に何回ぐらい面会に行きますか」の問い合わせに、平均一回だが、「ほとんど行かない」が四割以上あった。

船員の下船期間も昔とは違い、一年間に三、四ヶ月はとれて家庭にいる。その上面会に行けば、一回五・七万円は支出する。とはいえ何と非家族的な回答であろうか。

男は何を夢見、何を求めて働くのか。ただひたすらに馬車馬のように働くというのは、余りにも可哀そではないか。

近代化が急速に進み、船会社は国際競争力をつけるべく、コストダウンに血道をあげる今日、船も港も大きなロマンや情緒を失いかけているのではないか。人々は港に来て船の「汽笛」を聞き、歌を口ずさみ、船乗りに外国の話を聞き、海にあこがれを抱くのである。

現在のような寄りつきにくい無表情の港では、未来を背負う青少年の好奇心は生まれにくく、後には続かないだろう。

日頃何げなく聞いている「汽笛」も、時代の流れと共に大きな変化が生じてきたのである。今度港を訪ねるチヤンスがあれば、是非耳をそばだて聞くと共に、港の様子をじっくり観察して欲しいものです。

おわり

あとがきにかえて

「汽笛」を三ヶ月に渡り上・中・下と連載しました。

執筆に関し神戸海運局、阪神パイロット、タグボート、



日本点字図書館

(電)

*

*

*

わが国で初めての本格的な点字入門書が出版されたことが六月二十一日付の「赤旗」に詳しく報道されている。日本点字図書館長の本間一夫さんが書かれたもので、本の名は『点字入門』。中途失明の人たちのために、ひとりで学べるテキスト（ルーズリーフ式、八〇ページ）と、カセットテープ（一時間用二本）がついた本格的な入門書。同紙によると、現在目の不自由な人は、十八歳以上の人だけで約三十四万人（厚生省調べ）。うち一級（全盲）、二級（視力〇・〇二以下）の重度視力障害者は約四十万人だという。本書はこうした人たちにとって、待ちに待った本ができるでしょう。この本は「愛の小鳩事業団」の財政援助もあって、価格は一五〇〇円（送料無料）。希望者は代金を添えて左記にお申し込みください。

▼応募要領　詩・短歌・俳句・川柳・小説・エッセイ
・記録文学・戯曲
・職業を明記してください。
作品は返却しません。

短歌・俳句・川柳……官製ハガキ
(楷書・縦書で五首、五句連記)
応募部門、氏名(ふりがな)、住所、電話番号
诗……五枚以内(四〇〇字詰原稿用紙で楷書・縦書)

全日海等各方面のご支援ご協力を戴きましたことを、ご報告すると共に感謝とお礼を申し上げます。

本文の掲載を始めまして、船舶関係や各方面に少なからず反響を巻き起し、特に朝日新聞やサンケイ新聞の取材も受けました。記者も「確かに最近汽笛が聞こえないし、港も情緒がなくなりましたなあ」と語っています。読者には長らくのご愛読ありがとうございました。これにより港へのご理解を一層深め愛着を持って下され幸いです。

尚、「海員」へも掲載された「セピア色の港とかもめ」や「汽笛」にご意見ご感想がございましたら海文堂書店なり、神戸観光汽船、神戸市中央区波止場町中突堤、自宅(電話〇七八・九一一・〇四六四)までご一報下さい。今後の参考にさせて戴きます。

エッセイ……二〇枚以内（同）

戯曲（脚色も可）……五〇枚以内（同）

郷土誌の窓

▼締切 昭和五十七年八月三十一日（火）

△当日消印有効

▼賞 一席：一名（五万円） 二席：二名（二

万円） 三席：二名（一万円） 優秀作

：五名（五千円）（但し、詩・短歌・俳句・

川柳の部は一席三万円、戯曲の部は一席一〇万

円）

▼発表 昭和五十八年三月二十六日（土）

▼作品送り先 問い合わせ先

〒六五〇 神戸市中央区加納町

神戸市市民局市民文化課「ともづな」係

（電）

清文堂出版が企画しているのは、全国四十七の都道府県ごとに、歴史、文化、民俗、方言、地質、地勢、考古など、あらゆる分野にわたって論述した本格的な地方誌で、内容は一般読者にもわかりやすく、執筆陣も地元で地道に研究している人なら無名でも起用するなど、編集方針もユニーク。シリーズ名は『各県研究シリーズ』といい、第一期分として、和歌山、高知、徳島、宮城、北海道、福島の六道県を予定、このうち、『和歌山の研究』全六巻と、『高知の研究』二巻（全八巻）はすでに配本している。配本完了までは一県あたり三年半から四年はかかりそうで、百年以上の遠大な事業になるのは必

至。この大事業を清文堂出版全スタッフ10人足らずで取り組んでいる。まさに、上方商人のど根性出版といつて良い。全巻数はゆうに三百巻は超えそうだという。

* * *

兵庫県社会福祉協議会が『地域福祉のあめみ―社協

三十年史』を出版した。県下で初めての社会福祉事業史

である。神戸新聞五月二十五日付の記事によると、この

本はA5判、七百ページの大冊で、児童、老人、障害者

低所得者問題から、ボランティア活動や、施設の動向など戦後の地域福祉を集約したもの。県社協は昭和二十六

年三月、県社会福祉事業会、同胞援護会、民生委員連合

会など、県下の主要十五団体を中心に結成され、その後

三十年余、各地社協とスクラムを組んで先駆的な事業と

取り組み、地域福祉活動を創造、開発してきた。全国に

先がけの「敬老の日」の制定、三十年近く続く播州か

らの“愛のモチ運動”、昭和三十九年全県そろってスター

トした善意銀行など、ユニークな県社協活動を定着させていった。これらの活動、歴史を本文六章と九つの各

論に集約し、関係者の注目をあげている。一五〇〇部限

定出版。入手希望の方は一冊四〇〇〇円と送料三五〇円をそえて、左記までお申しこみ下さい。

〒五六一 神戸市中央区坂口通

県福祉センター

兵庫県社会福祉協議会

（電）

* * *

神戸市中央区にある私立親和女子高校の三年生の学級

日誌が本になった。女子高校生のさまざまな思いや悩み

を書きつづった本で、担任教師との交換日記にもなっている。書名は、同校の通学カバンの色にちなんで、『白

いカバンの青春』（神戸新聞出版センター刊、九八〇円）

神戸新聞の紹介記事によると、同校の学級日誌は、六十

年も前から続いている。クラスごとに毎日一人ずつ交代

で記述。余白に、担任が感想やアドバイス、質問に対す

る回答を書き加えている。この本は、毎年膨大な量にの

ばる全校の日誌から、三年生の記録だけを抽出して編集

したもの。

* * *

海の男を育てて三十年。神戸商船大学が五月二十六日開学三十数年の記念式典を行うとともに、三十年間の歩みを記した記念誌を発行した。『神戸商船大学・30年のあゆみ』がその本である。翌二十七日の神戸新聞・サンケイ新聞に記事が出ている。神戸商船大学は大正六年設立の私立川崎商船学校が始まりで、その後、文部省直轄の神戸高等商船学校となり、戦後間もなく、東京、清水の両高等商船学校と統合されたが、昭和二十七年五月二十六日新制大学として再発足した。この日発行された記念誌は、三十年間の歴史を伝える写真集で、卒業生や教員らが随想文などで思い出を語っている。記念誌の発行部数は三〇〇〇部で卒業生を中心に配ることにしているという。

* * *

戦前、都市対抗野球に出場するなど輝かしい歴史をもつ神戸税関野球部の歴史をまとめた『神戸税関野球部六十四年の歩み』が同部OBの手で発行された。六月六日付サンケイ新聞、六月十日付朝日新聞に記事が出ている。両記事によると、本を発行したのは、宝塚市安倉南

三一六一一二、尾西東治郎さんで、二年がかりで、一冊の本にまとめ自費出版した。A5判、四百四十三ページの豪華な本。尾西さんは、同税関に戦前の資料がないため、図書館や新聞社のほか全国各地の対戦相手などを取材して回り、この膨大な本をまとめた。大正時代の試合風景の写真やスケッチなど珍しい資料も随所に入れられ、五百部で約三百万円もの費用がかかったという。神戸税関野球部は大正六年に創部された歴史のある部で、昭和十一年には神戸代表として都市対抗野球に出場、十二年には全国実業団野球大会、十五年には西日本社会人野球大会で優勝するなど輝かしい戦績をもっている。

* * *

昨年三月二十日から半年間開かれた『ポートピア'81』の思い出が二冊の本になった。主催者の神戸ポートアイランド博覧会公式記録』（定価六、〇〇〇円）と『神戸ポートアイランド博覧会写真集』（定価四、〇〇〇円）がその本。六月二日付のサンケイ新聞によると、『公式記録』は、開催準備から会期中の運営など全経過を記録したもので、

A4判、五百七十六ページ。『写真集』の方は、行事、点景、展示など観客が感動したシーンをカラフルな思い出集としてまとめたもので、二百五十六ページ。発行部数は、『公式記録』六、〇〇〇部、『写真集』は八、〇〇〇部で制作費は九、〇〇〇万円。同協会では、この二冊をセットにして、全国の都道府県、県内の公共図書館、大学、高校、市内の小・中学校、政府関係機関、出展参加者などに四、五〇〇部を寄贈する。お問い合わせは（財）ポートピア'81記念財団（電話 [REDACTED] ）まで。

* * *

『兵庫県史』の別巻（年表・索引）がついに完成したことが六月二十五日付読売新聞に報道されている。これで通史五巻と別巻の計六冊がそろうことになる。同記事によると、『兵庫県史』を編さんしている県史編集室では、完結を記念して、品切になつている第一一五巻を増刷して、七月一日から希望者に販売する。別巻はA5判、四百七十九ページ。年表は原始・古代から幕末・維新にかけて三千二百八十事項を記載している。索引は人名、件名に分け、人名では五千四百十五人、件名は地名や事件、文書など、九千百八十四件を記載しているという。販売価格は別巻が四千三百円（送料四百円）、第一一三巻が各四千七百円（同五百円）、第四、五巻は各四千五百円（同）。一括購入の場合は二万五千円（同千百五十円）に割り引きになる。入手希望者は神戸市中央区下山手通りにあります。県民会館内にある県文化協会にお申し込みください。

* * *

六月十日付の朝日新聞に“二代四十年の労作実る”といふ見出しで、『神戸市文献史料第四巻・兵庫津の浜本陣安田家文書』が刊行されたことが出ているのが目についた。記事を紹介しよう。この史料集は、江戸時代、兵庫津で熊本・細川家（五十四万石）の浜本陣をつとめた網屋惣兵衛家（現安田家）の古文書を、文書の整理や研究に打ちこんできた先代の故安田莊右衛門さんの後、現当主の安田正造さん・泰子さん夫妻が引き継いで二代約四十年がかりでまとめたもの。浜本陣というのとは、特定の大名の本陣として参勤交代時の宿泊業務、米などの藩

内産物の輸送や販売に關係した兵庫津特有の船宿。兵庫津には十軒ほどの浜本陣があつたが、古文書がまとまつて残っているのは安田家ぐらいで、先代が晩年にほぼ作りあげた「安田家文書目録」（五百七十三件）が、今回調査に役立ったという。史料は宿泊業務の実際を示す記録、熊本から大阪へ運送する米の扱い、諸問屋・株仲間の様子など浜本陣の経済活動を物語るものが多い。A5判、三百八十一ページ。一冊二、五〇〇円で、市教委文化財課などで売っている。

* * *

朝鮮統一への熱い思いをこめて、思想的・政治的立場をこえて訪朝した兵庫の三十七名の人たちの文章が一冊の本になった。『平和への橋・朝鮮統一』（一、〇〇〇円）がその本。一九五五年から一九八一年までの兵庫から朝鮮民主主義人民共和国訪問者の手記である。発行は同刊行委員会で、当店にて販売しています。

* * *

「イエロー・ページ・オブ・コウベ」の八二年版が出た。これで四冊目。知る人ぞ知る市内のなんでも情報持

ち歩き便利本である。ポケットに入れるスリムなスタイルで若い人に受けているようだが、何故か「本屋」のところだけメツセージがない。さみしいね。定価は三〇〇円。全国でどのくらい「イエロー・ページ」が出ているのか。最後のページのリストによると、その都市は△神戸△△大阪△△奈良△△広島△△福岡△△長野△△仙台△△札幌△△松山△△など。これらの都市に旅に出た時ポケットにあつたら役に立ちそう。

* * *

最近、神戸からカワイコチャーンの大きな顔を表紙にした月刊雑誌が発刊された。

グラフィックで、ファッショナブルなA4版。発行先是、どこの出版社かと思うと、実はこれ、兵庫県広報課とある。役所の出版物は、まず、お堅いというのが通り相場だが、ちょっと、そのソフトムードにびっくりさせられる。

雑誌の名は「ニューヒューヴィー」で、今年四月から発行された。が、創刊と云えないと、この「ニューヒューヴィー」は昭和四十二年五月にはじめて出され、グラフ誌と

して県民の目に触れて来たからだ。ところが、もっとコンパクトに、読みものも入れて、という要望が強くなり、今回、衣替えしたというわけ。

内容は、ルボや、暮らしやカルチュア情報、県政に関するもの、陳舜臣や田辺聖子のエッセイも登場、バラエティに富んでいる。まだ、編集のはしばしに未成熟のところも見受けられるが、地方自治体発行誌としては、思いついた試みだけに、今後、どう発展するか興味深い。本店でも扱っており、定価二五〇円。

* * *

『中学生のお母さんへ』が実によく読まれている。この本は、教職歴二十年以上の先生百人がお母さんに語りかける形式で、本音を出し合った教育書である。B6判二百二十四ページで定価九〇〇円。当店にて販売中。

冒頭に、さだまさしの「闘白宣言」の替え歌が出ている。この本を象徴するような詩なので転記して紹介します。

●中学生宣言

中学生として世の親たちに言つておきたい事がある

かなり厳しい話もあるが、おれの本音を聞いておける手におれの進路を決めるな、友を悪く言うな、人と比べるな、めし（弁当）はうまくつくれ、いつも笑顔でいろ、できる範囲でかまわぬから、忘れてくれるな、これから的人生を精一杯歩むのは親でもだれでもない、おれだってことを親には親にしかできないことがあるから、それ以外には口出せずに、黙つておれを信じてくれ

* * *

まだまだ紹介したい郷土の本の話題はたくさんあるのですが、今回は載せきれないものをリストで紹介することにします。

▼『脳卒中と闘つた15カ月』 山本博繁著 神戸新聞出版センター刊 一、二〇〇円

▼『なじおの年中行事』 名塩探史会 B5判 八十三ページ

▼『意外史忠臣蔵』 飯尾精（大石神社宮司） 新人物往来社刊 一、五〇〇円

▼『尼崎の労働運動史年表』 尾崎地方労働運動史研究

会編 尼崎市 六、〇〇〇円

▼『ここに榕樹（がじまる）あり』（沖縄県人会35年史）

沖縄県人会兵庫県本部 三、五〇〇円

▼『発言'82』（第二号） ひょうご芸術文化センター刊 八〇〇円

（N）

▼七月に入りました。夏の到来です。新刊書コーナーでは、『ホリデー・コレクション』と名づけて、ホリデーを楽しくする本ばかり一〇〇点あつめてみました。

▼旅行書コーナーでは『夏山ミニブックフェア』を開催しています。夏休みの計画にご利用ください。

▼日本の民俗関係の本をあつめたブックフェアを東入口前のブック・プラザで現在開催中ですが、七月からは『東洋の心を読む——東洋文庫全点フェア』を予定しています。

▼二階ギャラリーでは、七月四日まで『欧米の秀作絵本・ポスター展』をくりひろげます。その後、七月十日から二十日まで、孤軍の最前線メディア・インフォメーションによるブックフェア『メディア・インフォメーション・フェイル』を七月二十四日から三十一日まで『創作人形展』。八月七日からは海

をテーマにした版画約四〇点をあつめて『海の版画展』を十五日まで開催する予定です。ご期待ください。

▼文庫ゾーンでは『ハイブリッド人間学のすすめ』

（講談社文庫）、『推理・サスペンスフェア』（文春文庫）、『田辺聖子オンパレード』を開催中です。

▼新書ゾーンでは『文庫と新書で読む二〇〇人の個人史——伝記・自伝フェア』を七月十日ごろから予定しています。

▼児童書ゾーンでは『林明子フェア』を開催中。一階西奥の児童書ゾーンでご覧下さい。

海文堂案内版